

**<学会記録II>13. 歯学部および歯科衛生士専門学校の学生に対する歯科麻酔科診療と歯科の救急救命に関する意識調査(東日本歯学会第21回学術大会一般講演抄録)**

著者名(日)	大桶 華子, 工藤 勝, 河合 拓郎, 國分 正廣, 新家 昇
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	22
号	1
ページ	101
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008804/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008804/</a>

実施した後に、アンケート調査を実施し、その分析結果から臨床実習開始前の学生における教育カリキュラムのあり方について検討を加えた。

【方法】調査対象は北海道医療大学歯学部平成14年度5学年84名であり、臨床実習の前段階であるポリクリ実習実施中の平成14年4月に8課題ステーションと4レストステーションの12ステーションを設置したOSCEを実施した。

アンケート調査は、レーティングスケール方式によるOSCE全般に渡る6項目と自由記載方式による2項目、各課題ステーションについて3項目ずつ合計32項目について行った。

【結果および考察】今回、本学で実施されたOSCEトライ

アル全体を通じてのOSCEの価値について、その価値を認めていることを意味する評価点3以上を付けたものが86.9%であり、OSCEは臨床実習に必要なある一定の「態度」や「技能」を評価するものであることを理解していると考えられる。また、全体を通じてのOSCEの難易度については、難しかったことを意味する評価点2以下が69.0%を占めており、多くの学生にとって難しい課題であったと考えられる。さらに、臨床実習参加の資格認定試験として、54.7%の学生が筆記試験の方が良いと回答しており、また、OSCEについては診療技術や態度を学習した後の臨床実習終了時(39.3%)に実施すべきであるとの回答が最も多かった。このことには、臨床実習前の教育カリキュラムが関係していると推測される。

### 13. 歯学部および歯科衛生士専門学校の学生に対する 歯科麻酔科診療と歯科の救急救命に関する意識調査

○大桶 華子・工藤 勝・河合 拓郎・國分 正廣・新家 昇  
(北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座)

【目的】今回は歯科患者の安全性・歯科麻酔科診療・歯科患者への救急救命に関する、一般社会での認知度と当講座の教育効果を検証するためにアンケート調査を実施した。本学では全身麻酔・局所麻酔・精神鎮静法・救急救命処置の臨床と教育を当講座が担当している。現在は歯学部(以下、D)1年の病院見学、D4年と歯科衛生士専門学校(以下、DH)1年の講義、そしてD5年とDH2年に臨床実習を行っている。

【方法・対象】歯科麻酔科診療を見学したD1年93名、講義・臨床実習を履修したD6年96名、そしてDH2年62名を対象とし、記名・自己記入式で各学年別にアンケート調査を実施した。

【結果】回収率は100%であった。入学前から「歯科で全身麻酔が適応」と認知していたのは、D1年36.6%、D6年20.8%、DH2年21.0%、入学(教育)前の時点で、「歯科治療で患者が死亡する」実態をしらなかったのは、

D1年65.6%、D6年68.8%、DH2年80.6%。「歯科患者の救急対応で最適な施術者」には、各学年の約4割が「歯科医師」とし、「医師」としたのはD1年が15.1%、教育後のD6年では3.1%であった。なおD6年では「医師と歯科医師の両者」が53.1%であった。

【考察】現状で歯科麻酔科診療の認知度は低い。2002年6月の歯科医院における、小児患者の死亡原因は歯科用局所麻酔剤によるアナフィラキシーショックという見解が報道された。歯科医療の現場では救急救命士の現地到着まで5分間以上を要するのが実情である。救急時に活用できる知識と手技習得は歯科医師と全スタッフに必須である。そのためには、D・DHにおけるバイタルサインチェックと生体情報モニターの活用・精神鎮静法などの歯科麻酔科診療、心肺蘇生法を含む救急救命処置の教育を充実させる必要がある。

### 14. 訪問歯科診療同行実習における学生の歯科医療福祉への認識

○沢辺千恵子、大山 静江、岡橋 智恵、長田 真美、小田島千郁子、五十嵐清治  
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

【目的】本校では要介護高齢患者に対応できる人材を育成するために5年前より訪問介護員養成研修を実施している。さらに今年度より訪問歯科診療同行実習を導入し

たので、これらの実習における学生の視点及び歯科医療福祉を担う歯科衛生士の役割への認識を把握するために本調査を行った。